

生きている看板

小川未明

青空文庫

町まちから、村むらへつづいて往來おうらいの片側かたがわに、一軒けんの小さなペ
ンキ屋やがありました。主人しゅじんというのは、三十二、三おとこの男であつ
たが、毎まい日にちなにもせず、ぶらぶらと日ひを送おくつていました。こ
のあたりの商しょう店てんは、一度ど、かけた看板かんばんは汚よごれて、よくわか
らなくなるまで、懸かけておくのが例れいであつて、めつたに、新あたらしく
するといふことはなく、また、新あたらしい店みせが、そうたくさんできて、
看板かんばんを頼たのみにくるといふこともなかつたのです。

「そんなことで、商しょう売ばいになりますかな。」といつて、ペンキ
屋やのことを近所きんじよでうわさするものもありました。

それも、そのはずであつて、いくら、地方ちほうの小さな町まちといつて

も、工場こうじょうでは、機械きかいが運転うんでんをして、人々ひとびとはせつせと働はたらいていたし、またほかの商店しょうてんでは、一銭せん二銭せんと争あらそって、生活せいかつのためには、血眼ちまなこになつていたからでした。

ペンキ屋やの主人しゅじんの兵蔵へいぞうは、ぶらぶらとして、自分じぶんの家の戸と口ぐちを出でたり、はいったりしてました。そして、ぼんやりとするときは、町まちの方ほうをながめ、あるときは、村むらの方ほうをながめて空想くうそうしてました。

彼かれが、どんなことあたまなかを頭おもの中に思おもっているか知しった人ひとはありません。ただ、彼かれが、こうして、いるうちに、彼かれを除のぞいて世よの中なかは、せつせと駆かけ足あしをしていたのであります。

ある男おとこは、一日いちにちのうちに、五円えんばかりもうけました。ある男おとこ

この一週間の間に、東京から、大阪の方までまわつてきました。また町へ、旅から役者がきて芝居を打つて去れば、その間には質屋の隠居が死に、指物屋の娘は嫁にいったのであります。けれど、ペンキ屋の主人の生活には、変わりがありませんでした。

「兵さん、このごろは、どうです。」と、聞くものがあると、兵蔵は、にやりと笑つて、

「あいかわらず、暇です。」と答えました。

女房は、質屋へ持つてゆく品物もつきて、子供のままで持つてゆきました。

「なにか、ほかの商売をすればいいのに、ああ遊んでいては、

困こまるのもあたりまえだ……。」「と、近所きんじよのものは、見るに見みかねて、ささやき合あったのです。

しかし、兵蔵へいぞうは、あいかわらず、のんきそうに暮くらしてました。ある日ひのこと、女房にようぼうは、辛棒しんぼうがしきれなくなつたというふうで、「なにをそうぶらぶらして、毎日まいにち、考かんえているんですね。私わたしたちは明日あした食たべるお米こめがないじゃありませんか。」「と、いいました。

「好きすいで遊あそんでいるんじゃない。仕事しごとがないのだもの、しかたがない。」「

彼かれは、こういつて、ぶらぶらしてました。そして、日ひに、幾い度どということなく、戸口とぐちを出でたり、はいつたりしてました。

ある日のこと、町の菓子屋から使いがきて、店の看板を塗り換えるから、ひとつ趣向を凝らして、いいものを描いてくれと頼まれたのです。

その菓子屋というのは、町での老舗でありましたから、女房は喜んで、

「おまえさん、いいものを描いて、評判をとってくださいね。そうすれば、また、ほかの家でも頼みますから……。」と、いいました。

兵蔵は、にやりと笑っただけで、答えませんでした。いよいよ町の菓子屋へ、仕事に出かけてゆくと、

「大将、きれいな女を描いてもらいたいと思うんだが、すて

きな、美人を描いてくれないか。」と、菓子屋の番頭がいいました。

「美人ですか？」と、兵蔵は、問い返した。

「ああ、だれでも振り向いて見るようなのをな……。」と、番頭はいいました。

「文字も書くんでしょうね。」

「ああ、字も書かなければ、看板にならないが、まあ、絵のほうに力をいれてもらいたいのだ。」

兵蔵は、しばらく、考えていましたが、黙つて、そのまま仕事にとりかかりました。家で、留守をしている女房は、せつかく、夫が仕事にありついたので、どうか、いいものを描いてき

てくれればいい、それが人の目に止まって、評判になつたら、

また、ほかから頼みにくるだろう、そうすれば、いままでのように困ることもないと、ひたすら、心で祈つていました。

また、近所のものは、兵蔵が、仕事に出かけたのを見て、
「珍しいことだ。」と、話をしていました。

兵蔵は、いつに変わらぬのんきな顔つきをして、しきりに筆を動かして、いま女の頭から描きはじめたところだ。町の間屋や、工場や、会社などでは、目まぐるしく、人たちが働いている間に彼は、鼻唄をうたいながら、さも楽しそうに、美人の姿を描いていました。

番頭は、二、三度、家の外に出て、兵蔵の描いている看

板を仰ぎましたが、いつまでも立って見ていずに、

「なるほどな。」といつて、じきに店の内へ引つ込んでしまひました。

その日の晩方には、美しい女の立ち姿がみごとに描き上がりました。兵蔵は、はしごから降りて、しばらく道の上に立つて、自分の描いた絵に見とれていました。

「ああ、よくできた。人好きのする顔だな。」と、いつしか、そばにきて立っていた番頭が、感心していったのであります。

兵蔵は、仕事を終わつて、道具を片づけて帰りかけた。そして店を出てから、もう一度自分の描いた看板を見返していたが、いつしか考え込んで、地面へ釘づけにされたように、じつとして

動うごかなかつた。

彼かれは、なんと思おもつたものか、また、絵えの具ぐを出だして、はしごへ上のぼりました。そして、しばらく筆ふでを使つかつていましたが、やつと、それで満まんぞく足そくしたように、絵えをながめて、はしごを降おりると自分じぶんの家うちの方ほうへ帰かえつてゆきました。そのときは、もう、あたりが、暗くらくなつて、人ひとの顔かおが、はつきりわからなかつたのでした。

翌よくじつ日あさの朝あさ、番頭ばんとうは、外そとへ出でて、ゆつくり看板かんばんを見みようとあおして仰あおぐと、あつ！ と声こえをたて、驚おどろきました。彼かれは、あわてて家うちへはいると、

「おい、みんな出でてみな！」と、小僧こぞうたちについて、騒さわぎました。それも、そのはずのこと、看板かんばんの美人びじんの頭あたまに、一本ほんのちい小さな

角つのが生はえていたからです。

「一ひと晩ばんの中うちに、角つのが、ひとりではに生はえるわけはない。看板屋かんばんやが、後あとから描かいたに相違そういないが、なぜこんなことをしたのだろう。」と、番頭ばんとうはいったのです。

「これから、看板屋かんばんやへいって、呼よんできて、描かきかえさせなければならん……。」と、番頭ばんとうは怒おこりました。

このときまで番頭ばんとうの後うしろに立たって、ものをいわずに、看板かんばんを見みていた、菓子屋かしやの主人しゅじんは、

「いや、描かきかえさせなくていい。なかなかおもしろいと思う。きつと、この看板かんばんは、世間せけんの評判ひょうばんになるだろう。」と、い

はたして、この看板は、世間のうわさに上った。

「あれは、鬼を描いたんでしよう。」

「いや、あんな、美しい鬼というものは、ありませんよ。やはり、美人を描いたので、顔は、こんなに美しくても、心は、鬼だということを現したものでしょう……。」

「しかし、なかなかあの角は、愛嬌がありますね。」

「そう、あんなに顔の、美しい鬼があれば悪くありませんな。」
 人々は、看板の絵を、さながら生きている人間を批評するようになり、とりどりにうわさをしたのでした。

いつのまにか、菓子屋の看板の美人は、この町の人たちの仲間入りをして、りっぱな存在になったのであります。

村むらの人ひとたちも、看板かんばんを目もく標ひょうに、道筋みちすじなどを語かたるようにな
 りました。しかし、これを描かいた兵藏へいぞうは、それから転てん々てん
 て、どこへか移うつつていってしまつた。いつしか、兵藏へいぞうのことは
 忘れわすられて、だれもいなくなつたけれど、彼かれの描かいた、菓子屋かしや
 の看板かんばんはその後長ごながく、ものをいわない人間にんげんのごとく、生いきて
 いて、町まちの名物めいぶつとなつていました。

——一九二七・一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「早稲田文学」

1927（昭和2）年11月

※表題は底本では、「生《い》きている看板《かんばん》」となつています。

※底本にある語句の編集注は削除しました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生きている看板

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>